

小諸市立 藤村記念館

MEMORIAL HALL OF TOSON

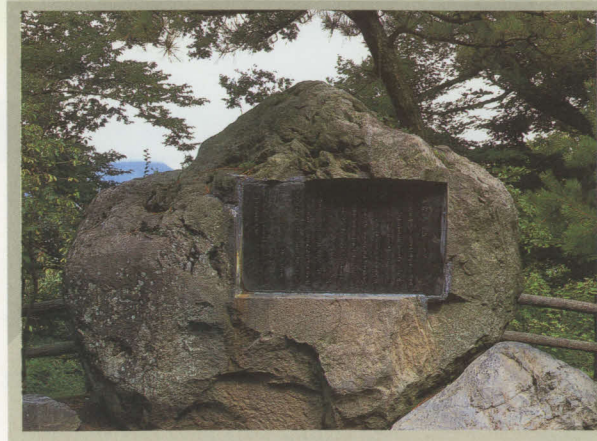


◆開館時間 8:30 - 17:00

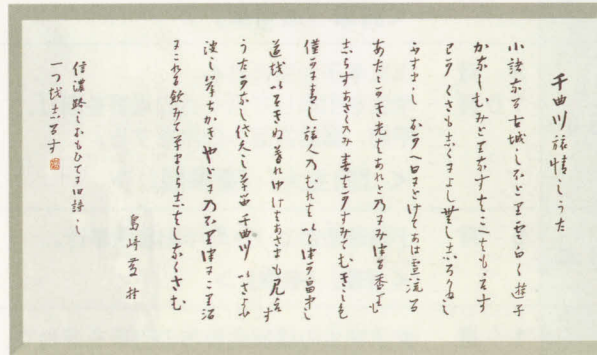
- 3月(第3週)-11月 …… 毎日開館
- 12月-3月(第2週) …… 水曜日休館
- 年末年始(12/29-1/3)は休館

〒384-0804 小諸市丁315
TEL0267-22-1130

懐古園内(小諸駅より徒歩5分)



藤村詩碑



藤村直筆の『千曲川旅情のうた』

千曲川旅情のうた(二)
小諸なる古城のほとり
雲白く遊子かなしむ
みどりなすはこべはもえず
若草も藉くによしなし
しろがねの倉の岡辺
日に溶けて波雪流る
あたにかき光はあれど
野に満つる香も知らず
浅くのみ春は霞みて
麦の色わづかに青し
旅人の群はいくつか
島中の道と急ぎぬ
暮れ行けば浅間も見えず
うたかなし佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しげし慰む



小諸義塾のスケッチ
(小山周次画)

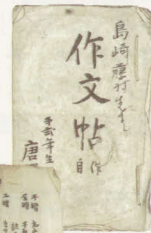


破戒
第一章
藤村

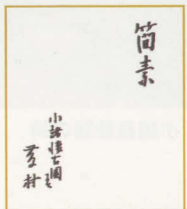
『破戒』第一章 藤村直筆の原稿



『裾野の雲』藤村の序文原稿



小諸義塾の教師時に
藤村が添削した作文帖



藤村が懐古園にて
したための色紙

千曲川旅情のうた(一)
昨日またかくてありけり
今日もまたかくてありなむ
この命なにをあくせく
明日をのみ思ひわづらふ
いくたびか栄枯の夢の
消え残る谷に下りて
河波のいざよふ見れば
砂まじり水巻き帰る
嗚呼古城なにをか語り
岸の波なにをか答ふ
過し世を静かに思へ
百年もきのふのごとし
千曲川柳霞みて
春浅く水流れたり
たゞひとり岩をめぐりて
この岸に愁を繋ぐ

藤村記念館

藤村の遺墨、遺品並びに関係資料を収集保管し、教養と調査研究に資する目的のもと、東京工業大学教授 谷口吉郎博士の設計により、昭和32年11月高雅で簡素な建物が懐古園内に竣工した。

昭和33年4月19日に開館し、翌34年6月藤村会より小諸市に移管され、以後、小諸市立藤村記念館として運営し今日に至る。

藤村著作の初版本



千曲川のスケッチ



破戒



落梅集

藤村が馬場裏の住居で愛用したもの



茶器



矢立て
(紙切り用小刀がついている)



灰皿セット

藤村と小諸

明治	事項	＜主な作品＞
32年	4月	木村熊二の経営する小諸義塾に国語と英語の教師として赴任。(満27歳) 函館の網問屋秦慶治の三女冬子と結婚。 馬場裏の土族屋敷跡で新家庭を持つ。
33年	5月	長女緑が生まれる。 『千曲川のスケッチ』の初稿が着手されたものこの頃。 ＜詩『旅情』『雲』＞
34年	4月	小諸義塾に女子学習舎が併設される。 ＜詩集『落梅集』＞
35年	3月 10月	次女孝子が生まれる。 学生を引率して八ヶ岳の裾野を回り、甲府、諏訪方面への旅をする。 ＜『旧主人』『藁草履』＞
36年	5月	小諸義塾創立10周年記念祭挙行。 ＜『爺』『老嬢』＞
37年	1月 4月 7月 10月	女子学生の講習会参加の引率を兼ねて、飯山町を訪ねる。 この頃、『破戒』の原稿を書き始める。 三女縫子が生まれる。 『破戒』自費出版の援助を求めて函館の岳父を訪ね、400円の出費を頼む。 丸山晚霞等と志賀村に神津猛を訪ねる。 ＜『水彩画家』『椰子の葉陰』『藤村詩集』『津軽海峡』＞
38年	3月 4月	神津猛より『破戒』完成までの生活費として150円を借用する。 小諸義塾を退職し、6年1ヶ月にわたる小諸生活に別れを告げ家族と上京する。

藤村ゆかりの跡

藤村旧栖地

昭和28年、小諸町馬場裏の旧居跡に碑を建立。碑面の文字は有島生馬の揮毫。



藤村旧栖地に立つ碑

小諸義塾跡

小諸義塾は明治26年創立。明治29年、耳取町に洋館二階建ての校舎を建設。塾長は木村熊二。明治39年廃校。後、小諸駅拡張のため駅構内に入る。昭和63年、「小諸義塾跡」碑を建立。その向側に復元され、平成8年、「小諸義塾記念館」が開館される。



小諸義塾跡の碑

木村熊二記念碑

昭和11年、懐古園の二の丸石垣の自然石に設置。藤村華「われらの父木村先生と旧小諸義塾の記念に」の文字を刻んだ碑。彫刻家荻島安二の作。



木村熊二記念碑

藤村詩碑

昭和2年、懐古園内の眼下に千曲川、彼方に浅間山を望む浅間台の地に建碑される。自然石に青銅のパネルをはめ込んだ碑である。碑面の詩は藤村自書になる『千曲川旅情のうた』で、パネルは高村豊周の作。